

## 子規の滑稽俳句を探る その一

暮目良雨

俳句は滑稽と挨拶といったのは山本健吉。従って、滑稽俳句という城を築き城壁を改めて建て廻らせなくてもよさそうであるが、八木健氏が「滑稽俳句協会」を打立ててこれを一本立ちさせようと力を注ぐのは、現代俳句の中で滑稽感が薄れたことに危惧を持ったのであろうと推察する。但し、注意すべきは滑稽の名の下に川柳と見紛う作品を垂れ流す危険があることは心しなければいけない。

滑稽俳句の定義を私は未だ知らないが作品を鑑賞するうちにこれが滑稽俳句だというものに遭遇すると思う。先ず、子規の俳句の中から探してみよう。

漢文の素養に裏打ちされた子規の文学観は現代の俳人には追いつけないものがある。たとえば

春水の盥に鯉の唼嘴かな 子規

唼嘴(けんぐ)は「あぎとうさま」であるが今ではこのような句が句会に出されても誰も理解しがたいであろう。

しかし一方で子規は大変判りやすい俳句を多産している。このなかに私たちの心をくすぐる滑稽俳句が潜んでいる。以下例句によって楽しんでみたい。

蒲団から首出せば年明けてゐる 子規

芭蕉、蕪村の俳句の型からはまったく遠い感じのものであるが一茶の自由気ままな雰囲気を持っている。

畏まって新年を迎えることをしないこのとぼけた感じは子規独特のものである。同じ光景であっても虚子は

去年今年貫く棒のごときもの 虚子

と詠っている。

子規は感じたままを吟くように句にし、虚子は写生の奥に見た、形のないもの、ぼーっとしたものを掴むことによって句を得た。滑稽という意味で二つの句を見比べてみると子規の句が勝っていると思う。

子規の句は子規三十歳のとき、虚子の句は虚子七十五歳のときに作られたもので質的な違いは同じ土俵の上で議論できないことを知っておきたい。

緋の蕪の三河島菜に誇って曰く 子規

緋の蕪は「松山城の見える所でないと育たない」といわれる松山名産の蕪。一方、三河島菜は「仙台芭蕉菜」という別名を持つ、玉を巻かない白菜の一種で葉が長く食感を楽しむ漬物用の菜で、今では希少種になっている。

子規の住んだ根岸の辺りではよく食べられたのであろう。「三河島菜が美味いって言うが、君、緋の蕪には及ばんぜよ」と言った故郷自慢の句である。芭蕉の句に

**蒟蒻に今日は売り勝つ若菜哉 芭蕉**

がある。蒟蒻は日常、刺身代りに食べられていたほど人気があるのだが七種の日の若菜には負けるというギャグである。子規もこの句を意識したか聞いてみたい。

(続く)